「参勤交代」の源流と歴史

増山雄三

天下人への服属儀礼である「参勤」は、豊臣秀吉が関白の頃からあったというが、それをさらに遡ると、鎌倉時代の御家人の義務だった、鎌倉番役などの軍役負担に、その原形を見る事ができる。

その後、江戸時代になり、徳川氏への「参勤交代」は、幕府が課した大名軍役の一つとする事で、役儀と奉公として義務ずけ、強力な大名統制と権力の集中を図って、幕藩体制の長期存続を可能にしたのである。

そして、諸大名は徳川氏に対する臣従の証拠として、大名が家族や妻子を人質として、江戸へ差し出した事で始まり、藤堂高虎は弟の正高を江戸へ送ったのが早い例だが、寛永十二年（一六三五年）に、三代将軍徳川家光は「武家諸法度」をつくって、大名は原則と

して国元と江戸を、一年交代で往来することを、義務付けられたのである。

それでも、この武家諸法度は、参勤作法として従者の員数を定めただけで、百万石以下二十万石以上の大名は、二十騎以下とし、十万石以下の大名は、その分に応じる様に規定して、参勤交代を制度化したのである。

そして、寛永十九年（一六四二年）には、制度の改正が行われ、譜代大名の交代期は六月とすると共に、特に関東の譜代大名については、在府と在国を半年として、八月ないし三月交代となり、対馬藩の宗氏については、遠国なので三年一勤とするほか、水戸藩や老中などの役付大名は、江戸定府となった。

この参勤交代の目的は、大名の経済力を弱める事と思われがちだが、そうではなく、江戸幕府は行列の人数を減らすとか、華美にならないように命じたものの、大名たちは家格に関わるため、費用は削減できず、結果的に藩の赤字を増大させてしまった。

そんなことから、西国大名が三月末から四月にかけて、江戸へ参府すると、江戸にいた東国大名が暇を与えられて国元へ帰り、一年後、今度は東国大名が参府し、西国大名が江戸を出る事になるのである。

近世交通史の専門家である、九州大学名誉教授の丸山雍成氏は、先述のように、鎌倉時代にその原形があったそれは、幕府の将軍である「鎌倉殿」を警固する、鎌倉番役などがそれにあたるといい、室町幕府も、こうした奉公の義務を継承して、守護大名を京都に集住させていたという。

さらに丸山氏は、応仁の乱によって室町幕府が力を失い、制度は形骸化してしまったといい、また、戦国大名が領国の家臣に、本城への出勤を義務付けた事が、織田・豊臣政権における、参勤へと発展していったという。

十六世紀末、関白となった秀吉の命で、諸大名が妻子を伴って上洛するようになり、大名が政務のため国元へ帰る時は、その嫡子を

京都に留め置かねばならず、また挨拶に行かなければ、反逆すると見なされたのだ。

このように、秀吉から事実上強制されていた参勤は、一六〇三年に、江戸幕府を開いた徳川家康にも引継がれたとはいえ、豊臣氏がその後の大坂の陣で滅亡する前までは、徳川と豊臣の両者に参勤して、いわゆる、二股をかける大名が多かったという。

この参勤交代は、大名が親族を幕府に差しだす形で始まった制度だが、幕府側は、それが強制でないように振舞い、幕府関係者から助言させ、大名の自発的行為として、この政策の実現を図ろうとしていたようだ。

そうする事によって、幕府側としても、大名も自主的に江戸へやってきて、妻子も帯同してくるので、まず戦になることはないと考えたので、江戸市中に屋敷を与えて、あたかも、歓迎したように装ったのであろう。

「参勤」というのは、中国では諸侯が天子に拝謁する事を意味していて、日本でいうよ

うな、幕府に反抗するための、経済力を蓄えさせない目的ではないというが、それが、大名の経済力を殺ぐ事になったのは、結果的にみれば、そうなったのは事実である。

それでは、国元と江戸との報復に要した費用というのは、一体どれほどの負担だったかといえば、旅費以外に大名一行の在府費用を含めると、それは莫大な出費になっていて、ある藩では、直轄する領地からの収入の、六～七割以上に達していたという。

それに、参勤に要する人数も、幕府が明確に指示したのではなく、むしろ、幕府は街道で渋滞を引き起こさぬ様、人数を減らす事を命じていたが、ただ、大名側は家格に関わるため、簡単に減らす事ができなかったのだ。

また、幕府も参勤した大名から、献上品を受け取ったお礼に、参勤費用を一部穴埋めしたため、双方とも経済的に苦しくなり、制度の簡素化を試みられたが、いずれもうまくいかずに、赤字を増やすばかりだった。

ところが、幕末に黒船が来航するようになると、幕府は参勤交代の制度を緩和し、参府を三年に一度として、家族も国元に戻すなどの改革を行ない、大名には国防に力を入れる様に命じたのである。

しかし、外交や内政ともに大きく混乱する中、慶応三年（一八六七年）に、第十五代将軍の慶喜は、大政奉還を決め、それに伴い、徳川政権の象徴でもあった、参勤交代の制度も**廃止**されたのである。

ところで、その参勤交代制度は、江戸の文化を地方に伝える役割も担っていたが、文化や学問それに食などが、それぞれの国元に帰っていく武士を通じてもたらされ、そしてそれ以外にも、多くの影響を与えたのである。

それで、現在、藤井聡太の活躍で人気の**将棋**も、江戸のルールが参勤交代で全国に広まり、それが統一される事によって、数多くの愛好家を増やしていったのである。

こうしたルール統一のきっかけは、一六三

六年、二世名人だった大橋宗古が、「打ち詰めの禁止」などの、基本的な規則を定めた文書を、幕府に提出した事から始まった。

この打ち詰めの禁止というのは、持ち駒の歩を打って、相手の「玉（王将）」を詰ませる手が反則とされると、攻め方に工夫が必要になり、それが、それまでやっていた将棋に、深みを与えていったのである。

江戸では名人が道場を開き、多くの武士たちが通っていたが、遊戯史に詳しい古作登さんは、武士たちが国元に帰って、将棋をさすうちに、名人が定めた規則が、各地に伝わっていったのだろうと話している。

実際に、現代の将棋界では、藤井聡太がそれを逆手に取り、相手を打ち歩詰めに誘うという、高度な「玉」の逃げ方を見せる事があるので、他のトップ棋士すら感心させるが、かつての二世名人は、そんな先の時代までの事を、果して深読みしていたのだろうか。

令和四年三月